

「ヨハネによる福音書」を読む（第8回）

ヨハネ福音書 第14～15章

2010年2月7日（東京 新宿）

奥田 昌道

恩恵と真理 躰きの石 十字架と聖霊 いい出会い 別れの言葉 私とあなたは一つ 私は無責任だ 今や全部成就した 葡萄の樹と枝 わが愛の中に居れ 永遠の生命をいただく 祈り

●恩恵と真理

皆さん、よくおいでくださいました。大変寒い日々でございますけれども、北海道とか日本海の方、東北地方は大変な雪で苦しんでおられますけれども、こちらの方は非常に晴れ渡って、昨日も今日も素晴らしいお天気でした。私の宿舎でありますKKRホテルからは毎朝、富士山が真っ白に見えます。そんなときにこうして皆さんとご一緒にお会いできることをとても幸いだと思っています。本当に一期一会といえますけれども、こうしてお会いできるということは本当に素晴らしいことです。

今日は、2月7日です。2月7日といえば、もう皆さん御存知ですよ。新しい方は御存知ないと思いますが、キリスト召団の創始者であります小池辰雄先生がお生まれになったのが1904年の2月7日でありました。今年が2010年ですから、生きておられたらちょうど106歳になれるわけです。そういう2月7日が記念すべき日で、それが聖日、日曜日に当たりましたので、一言申し上げた次第です。

「……さきほどの司会者のお話で」^{みこころ}「ご自分を見すぎるごこと、ご自分を責めている。これは御意ではないんです。御意は、

「それは私がやることで、私が引き受けたよ。あなたが自分を責めている、それは全部私が引き取った。だから、あなたはもう何も無い。十字架を見てごらん。十字架の上で、あなたは全部そこでもう完全に片づけられた。十字架で私とあなたは一つになったんだから、自分を責めることはもう止めなさいね」

と。これが主の御意なんです。一歩手前まで来ておられるんですけども、ついつい自分を責めてしまわれる。良心的な人に限ってそういうことが非常に多い。でも、いつまでもそれに留まっていたら、そこから一歩も出られません。人を助けることもできません。自分の問題が完全に片づいて、「さあ、行きなさい！」といって、ドーンと押してもらって、飛び出していく。これが我々の姿なんです。

旧約時代というのは、飛び出せないんです。

「お前は罪びとである。お前は御意に適っていない」



と、そういう重い重い荷物が背中にあつたんですね、旧約時代というのは。だから、いくら素晴らしい律法をいただいても、それは重荷にこそなれ救いにはならない。「あんな律法がなかったらどんなにか楽だろうな」と多分、パウロさんはそう思ったでしょうね。だから、ローマ書に出ていますように、律法は本来、聖なるものであるという。神の御意なんです。

「生命を与えるはずの、生命へ導くべき律法が、私をなんと魂の死へ、全く自由がなくなつて魂の死へ、暗闇へと私を追いやっていくので、愕然とした。私を死に至らしめることに驚いた」

とローマ書7章で告白している。

だから、クリスチャンも往々にしてその落とし穴に嵌まることがある。

「自分はクリスチャンなんだから、神の御意にかな適うようなクリスチャンらしい生活をしなければならぬ。それに引き換え今の自分は……」

と言つて自分を見て、どんどん狭く狭くなつて、その果ては魂の死に至ります。そうすると、何のためにキリストさまが尊い生命を投げ出して、あなたを救い出そうとしてくださったのか。それが全く、「親の心、子知らず」ということになってしまう。もつと図々しくなつてもらわなくては。

キリストさまに思いつきり甘えてください。完全に委ねるんです。これは大変ですよ。「それで本当に大丈夫なんだろうか？」と思われるかもしれない。でも、完全に明け渡して——どうせ地獄往きの身なんです、我々はみんな——どんなに自分を責めたつて自分はいくらならない。どうせ地獄往きの身を、キリストさまは、

「お前はもう大丈夫だよ」

「こんな私が？」

「そうだよ、私が来たのは義人を招くためではない。罪びとを招くためにやつて来たんだ」

と。ユダヤの教えでは、義人が神の国に入り、罪びとは捨てられるんです。詩篇第1篇に、

「あし悪きものの謀略にあゆまず みちつみびとの途にたたず あざけ嘲るものの座にすわら

ぬ者はさいわいなり」（詩篇1：1）

とあります。あの通りなんです。そういう悪しき者の道は審判に耐えない。我々も、へたとすると自分はとても義人ではない。とても神さまの御許になんか行けない。クリスチャンになればなるほど余計苦しくなる。

損するんですよ。クリスチャンになる前は、でたらめ出鱈目なことをしていても誰もとがめない。

「みんな同じだ、お前なんかまだましな方だよ」と、そう言ってくれる。相対的比較でやる。そうしたら、「私もいいところあるじゃないの」と。ところが、神さまの前に出たら、相対比較なんて全然通用しない。絶対的な評価です。絶対評価だったら、全部落第です。そう



でしょ。鈍感なやつはまだ幸せなんですよ、それに気づかないから。

でも、鋭敏な人は——そのお手本がルターさんです、模範的な修道僧といわれた——そのルターさんが、心の中は本当に苦しくて、いかにして自分はこの神さまの審判に耐え得るのだろうかと思つて、それで独房の中でぶつ倒れていたという。それを友だちが見つけて救い出した。それでやつと命を取りとめたという話が伝わっています。その時にルターを支えたのが、ローマ書3章だった。

「神の義は——審く義ではない——福音のうちに表われた。人を信仰から信仰へと導いていく」

という。「神の義は審く義だ」と思っていたら、「福音の中に義が現れている」という。「福音」というのは、イエス・キリストに関する一切の音信、言葉です。福音というのはイエス・キリストそのもののご生涯。御業もお人成りも、すべてを含めた全イエス・キリスト。その中に神の義は現れている。

「律法はモーセを通して与えられたけれども、恩恵と真理はイエス・キリストを通して現れた、もたらされたのである」

と。「恩恵と真理」、これはどんな罪びとをも無条件に救いあげる。逆らっているやつはだめです。逆らい続けたらだめです。これは拒絶反応ですから。水は飲まなければならぬでしょ。「水は要らない、食物は要らない、何も要らない」としたら、これはもう餓死、枯死するだけです。枯れてしまいます。でも、「いただきます」と言つて、神さまのご好意をそのまま素直に受けとる。これが「幼児の心」です。幼児は分け隔てをしませんよ。いいものを下さる方に対しては、みんな「ありがとう、ありがとう」と言つて、いただく。神さまはキリストを通して最大のプレゼントを下さったわけですね。

「生命だよ、生命だよ」

「その報酬（代価）は何ですか」

「私が払ったよ」

と。十字架の死です。「罪の払う報酬は死である」という。

「その報酬は私が払った。あなたは無罪放免。もう自分を見ないで、私だけを見ていきなさい」

と。さっきの詩篇第1篇に、

「かかる人はエホバの法をよろこびて日も夜もこれをおもう」（詩篇1：2）

とあります。「昼も夜もこれを使う」と。昼も夜も、「イエス・キリスト、イエス・キリスト、イエス・キリスト」と、そっちに夢中になる。皆さんはもう子育てをなさる年齢でなくなつたから、子供さんのことは放つておいて、「昼も夜もイエス・キリスト、イエス・キリスト」と、心の中で念仏を称えるように、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と。私の母の方の祖母は「なまんだぶ、なまんだぶ」といつも言つてましたよ、口ずさんでいました。そのよう



に我々は、

「イエスさま、イエスさま、イエスさま。主さま、主さま、主さま」

と言う。うつむかないで、胸を張って——いや、だんだん私も背中が曲がってきたんですよ。これはいかん、胸を張らねばならないと思う——胸を張って、向こうにイエスさまを見つめて、「主さま、主さま」と。お臍^{へそ}を見てはだめです。

そういうふうにしてたら、向こうの吸引力、吸い込む力で吸いよせられていく。それに委ねるんです。自分の力では絶対にならない。「自分の信仰」なんて、そんなものではない。向こうの吸引力がすごい。それに身を任せるだけ。いいですね、それが「今日、生まれ変わる」ということです。

さきほど読んでいただいた詩篇23篇、それから第1篇は素晴らしいところです。特に23篇は、キリストにおいて成就しました。そして、今日やりますヨハネの14章、15章はピークですよ、これは一番素晴らしい。本当に「華^{はな}」です。しかも、私は申し上げたい、マタイ・マルコ・ルカ——これは共観福音書といえます——福音書という点では共通な福音書ですが、そこにさらに「共観」という、同じ角度から物事を観^みている。それに対して、ヨハネ福音書というのは少し独特の味、独自の面がある。どこが違うんでしょうか。

マタイ・マルコ・ルカもそれぞれ特色がありますよ。マタイはマタイらしい特色。マルコはマルコらしい、実にビビッドにダイナミックに進んでいくという面がある。ルカは、しつとりとしたハートに訴える面がたくさんあります。そういう個性が違いますが、同じ観点から見ているという点で「共観福音書」という。

それに対してヨハネ福音書は或る独自性をもっている。その独自性は何でしょうか。よくこれは「霊の福音書」と謂われる。霊の世界、霊の次元、これを扱っている福音書だというふうに謂われます。必ずしも歴史的にキリストのなさった事跡を時間的にフォローしているのではなくて、霊の次元、あるいは天の次元を開示している福音書だというふうに謂われます。

●躓きの石

この前に旧約聖書がありますね、私は旧約聖書を「躓きの石」と言います。旧約聖書は玉石混交です。

「聖書は始めから終りまですべて神の言葉である」

と信じきっている人には、私なんかは死刑に処せられてもしようがない。そうではなくて、私は玉石混交だと言う。あれを文字通りそのままを受けとったら大変なことになる。

「神に従わないような異民族は皆殺しにせよ」

なんて、民数記略に出ています。そんなことは今の時代に通るはずがない。

「敵対する者は徹底的に殲滅^{せんめつ}せよ」



なんていうことが、宗教の衣をまとって出てくるから、余計やっかいなんです。

「女、子どもも全部殺す」

なんていう。そんなものは今の世に通用しない。私はそう信じています。それを全部引っくり返してくださったのがイエス・キリストです。だから、キリストというお方の光で旧約聖書を見ないと、「あれは今も通用している」なんて思ったら大間違いです。ところが、大間違いをしているようなキリスト教の派がたくさんあると思います。旧約聖書は、ひとつには民族史なんです。書かれた民族の歴史としてはものすごく詳しくて素晴らしいものだと思いますけれども。日本に民族史があるかどうか、古事記、日本書記なんかがあるかもしれませんけれども、かなり神話的な要素が入りこんでいます。

どの民族でも民族史を持っています。アブラハムから始まって、ずうつとイエス・キリストに至る流れがあります。しかも、その民族史の中のひとつの特色は、ここに神の言葉というものの、あの「十誡」を始めといたしまして、神さまのイスラエルの民に対する言葉がそこにふんだんに出てきます。神の言葉が出てくる。これはいわば人間の行為に、心に、姿に対する語りかけです。それからもう一つは祭儀です。「レビ記」なんか見えますとうんざりしますよ、本当に。レビ記を読んで楽しいと言う人の顔を見てみたい（笑）。小池先生は、

「聖書は楽しくてしょうがない」

と言われるけれども、レビ記はきつとそうじゃない。「あんなものは御免こうむるよ」と仰ると思います。

祭儀というものは、宗教というものに欠かせない。ところが、キリストはそれを全部撤廃してくださいました。キリストが来られたら、そんなものは無くなってしまいました。ご自分を犠牲として献げた。それでもう終わった。一回きりご自分を神の前に献げられた。それでもう祭儀はなくなつた。ヘブル書にはつきり出ています。

神の言葉、この分は残ります。これはいわば「律法」としてずうつと残ってくるわけです。この律法の中にキリストは生まれた。ところが、律法に対する接し方がまるで違った。パウロは律法のチャンピオンです。

「律法の義につきては自分には責めるべきところがない。律法は完璧に守っている」

と、パウロは思っていた。ところが、その律法を完璧に守っている結果が、キリストを十字架につけて殺すという大変なことになってくる。これは16章に出てきます。キリストを迫害し、キリストをやつつけるということによって「自分たちは神に仕えている」と、そう信じてこんでいる。そのくらいにこの律法というのは危ない両刃の剣もろはつつるけんですから、一歩間違うと、神さまに完全に反逆している。特に「自分は正しい」と信じている、そういう姿は。

ヨハネ伝が一番よくわかりますね、人の姿が。同じ律法をいただきながら、人の判断、考え方、それとキリストの御思みいがどんなに天と地ほど離れているかということが、この



ヨハネ伝を読みますとよくわかります。我々もへたすると、キリストに逆らっていたあの人たちと同じような考えに陥りかねない。つまり、躓きの石です、キリストご自身が躓きの石になっていました。

しかしながら、ヨハネ伝でやりましたね、5章です。

「あなた方は聖書（旧約聖書）の中に永遠の生命があるかと思って、一生懸命に調べている。ところが、実はこの聖書は私（イエス）のことを証している。やがて救い主、メシアが遣わされる。そのことを聖書は証言している。だから、文字の中に永遠の生命を捜すのではない。ここに本尊、ご本体が来ているではないか。私がそれではないか」

と。そうしたら、

「あいつは己を神と等しくする。怪しからんやつだ」

と反発された。安息日は、神さまが人を生かす日であって、人に生命を与え給うために安息日という制度ができた。つまり、平日は一生懸命にこの世のために働いている。せめて安息日は、仕事を休んで、昼も夜も神さまのことを安心して思いなさい。そうしたら、生命が流れてくるから。安息日は、人の業を休んで、神の生命にあずかるという日だと。

「神さまは働かれる。神は今に至るまで働き給う。私も働くんだ」

と言って、安息日に人を癒した。そうすると、

「あれは安息日を破る怪しからん律法違反だ！」

と。だから、「安息日違反」と、それから己を神と等しくした冒瀆、瀆神、「神を冒瀆する」という、この二つの理由でキリストは処刑されることになった。

ピラトにとっては、そんなのでもいいことです。「安息日はどういう日か」なんて関係ないですよ、ピラトのローマ法では関係ない。「己を神と等しくする」かどうか、そんなことはどうでもいい。皇帝と対決したら、これは困ります。けれども、宗教の世界で、「神は一つか二つか」、そんなことはどうでもいい。だから、「この人には何も罪はない。赦してやろうじゃないか」と言っただけでも、「イエスを殺せ、殺せ！ バラバを赦せ」と言い張ったでしょ。それでピラトは諦めました。そのくらいに人の思いというのは、同じものを見ていても、「同じ神の言葉だ、神の律法だ、聖書だ」と言いつても、そのくらいまるで天と地ほど受けとり方が違うということに気づいてほしい。

神さまが、

「もうあなたはいいんだよ、生命は与えているんだよ」
と言われても、

「いいえ、私はまだ罪深くて、信仰がなくて、クリスチャンらしくなくて……」

と、これは人の思いなんです。勝手に自分でつくりあげた人の思いです。誰が喜んでるか。サタンが喜んでる。



「あれはキリストにつかまれたら大変だ。自分の一票がなくなる。キリストに一票を取られたら今度の選挙は大変だ」

と、そういうようなもんですよ。眠っている人は、サタンは放っておく。これから目覚めようとする人、燃えようとする人、それを何とかして潰（つぶ）しにかかるというのがサタンという霊、働きなんです。それに乗ってしまうと、「オレオレ詐偽」ですよ、あれは。だから絶対にキリストから目を離したらいかん。

●十字架と聖霊

そのキリストは、十字架です、これですべて片づいている。しかも、これで片付けっぱなしではない。聖霊という姿で「お前の中に宿るよ」と言われる。

「聖霊という姿でお前の中に居る、宿る。そして世の終りまで生涯、これからずっと一緒にいるよ」

と。これがこのヨハネ伝の特色だということ。これは共観福音書には出ていません。共観福音書では、ルカ伝では、

「この火すでに燃えたらんには、我なにをか望まん」

とある。イエスの中には聖霊が燃えている。けれども、人々の中に聖霊が燃えない。罪というものがありますから。どんなにイエスが熱く燃えられようとも——御業は現れますけれども——一人ひとりの中に聖霊という神の生命は宿らない。これはキリストが血のバプテスマの十字架を通らなければ聖霊は来ないんです。だから、弟子たちがこんなふうでデラメなのは当たり前です。弟子たちはみない人ですよ、熱心なんです。

「あなたのためには命も惜しみません。私に限っては」

と言ったペテロは、

「イエスを知らない。イエスを知らない、知らない」

と三度も否（いな）みました。鶏が鳴きました。ペテロはさめざめと泣いた。これが人間の姿です。そういう、だめ野郎な私たち一人ひとり、これを「原罪」という。原罪というのはそういうことです。どんなに気張つてみても結局、神さまの思いと我々の思い、あるいは人格、これが合致するということはありえない。土から生まれた者は、カエルみたいに——あの小野道風（とうふう）の話がありましたね——柳の枝をめぐけて跳びはねて跳びはねて最後に跳びついて枝を捕まえるというような話だったと思うけれども。せいぜいそこまではよくても、また落ちる。噴水みたいに上へいつては落ちる。これが我々の姿です。

ところが、神さまのイエス・キリストは聖霊という姿をもつて、聖霊という霊となって、我々一人ひとりの中に宿られますと、からだが変わるんです、変化する。その聖霊が天へ引っ張って行ってください。聖霊が引っ張っていく。このことを一番はつきりうたっているのがこのヨハネ伝です。このマタイ・マルコ・ルカでは、「聖霊を与える」という約束まではある。



「まして天の父はあなた方に善いものを下さらないだろうか。だめな親でも子どもにはいいことをしてやるではないか。まして天の父はあなた方によきものをくださる」

と。それは聖霊だと学者が言う。約束としての聖霊、ここまではこの共観福音書に出てくる。けれども、聖霊をいただいた、あるいはいただく現実はどういうものかということ、この共観福音書では出てきていない。それがふんだんに出てきているのはこのヨハネ福音書の14章、15章、16章ですよ。

よく、人は、あるいは学者は、「ヨハネ伝には十字架がない」と言います。うそですよ。十字架は隠れているんです。

「私が父のもとに行かなければ、助け主は来ない。行けば必ずあなた方に助け主を与える」

と。「助け主」という言葉は、この頃の新共同訳聖書では「弁護者」と訳す。あれはいやです、ね、「弁護者」はいやですよ。助け主ですよ。「パラクレートス」と言いまして、確かに「弁護する者、忠告する者、そばに立って助けてくれる者」という意味だから、間違いではないけれども。「弁護者」といったら、我々裁判官にとっては、検察官とか弁護士とかを連想して、いやですよ。「弁護者」なんて言われたら、ガックリきます。

私はいつも読んでいるのは、文語訳聖書ですけど、カトリックの「フランシスコ会」というところから出ている新約聖書はいいですよ。新共同訳を読んでも感動なんてこない。14章から読んでみてください。全く散文的であって、何の感動も私にはもたらさない。それで感動を受ける人は素晴らしい人ですよ（笑）。でも、このフランシスコ会の聖書はいい。ちゃんと註が付いている。必要十分な註が付いています。しかも、大きな字で、余白を尽くさなくて読みやすい。我々の年齢には向いていますよ。小さな小さな字の聖書を——まあ若い人ならいいけれども——ご年配の方が小さな小さな聖書をお持ちで真っ白のままでは、これはだめですわ、やはりカラフルでないと。

このフランシスコ会訳ではちゃんと「助け主」と書いてある。それから「平和」ではなく、「平安」と訳している。

「私は平安を与える。平安を残しておく」

と。新共同訳では「平和」と訳している。何でだろうなと思いますけれども。

とにかく、お読みになって、ぐんぐん迫ってくる。そこで感動して打ち震えるという、感動に打ち震えるような、そういう聖書でないと、毎日毎日読むのにうんざりしますもの、新共同訳では。だんだん嫌いになってくる。そうではありませんか。私がおかしいのかもしれないけれども。まあ初め頃から新共同訳に慣れてしまえば、それでいいのかもしれないけれども。私個人はそうなので、皆さん、それぞれのご自分に合うものをお持ちくださればよろしいかと思います。



● いい出会い

それで、さきほど申しましたように、旧約聖書はイエスというお方を証言している。ここにキリストという方に焦点をしばって、それに合致するようなキリストのお心、お言葉、そういうものに合致するようなものを受けとっていく。そうでないものはカットしていく。キリストご自身も、

「敵を憎めと言われている。しかし私はそう言わない。敵を愛せよ」

と言われた。ことごとく引っくり返りしておられる。そのように、イエス・キリストの全存在、御業、御言、ご生涯、そういうものからの光で照らして、旧約聖書で合致するものは受け入れる。そうでないものは御用ありません、要りませんと言って断っていく。そういう読み方をしないとだめなんですね。

律法もそんなふうに、へたすると人を審く。パリサイになってしまうと、これもだめ。

「律法はモーセを通してやってきたけれども、恩恵と真理はイエス・キリストを通してやって来た」

と。この旧約聖書の次に表れたのがこの共観福音書です。これはイエス・キリストのなさった——たった三年間ですよ——三年間、弟子たちと一緒にあのユダヤ地方を、ガリラヤ地方からエルサレムへかけての旅をしながら、あるいは弟子たちに語られたこと、会堂でお話になったことが記録されている。それが何年ものちに再現していますから、いろんな資料をベースにしてやってますから、いわゆる客観的真實性なんてものは保証されています。けれども、そういう断片を通してイエス・キリストというのはこんなに素晴らしいお方だということが充分に表れています、この三つの福音書を通して。だから、いわば見える形のイエス・キリスト——ご飯を食べたり、眠ったり、泣いたり、悲しんだりという——そういう見える形のキリストを描いているのがこの三つの福音書である。それに対して、ヨハネの福音書は更に見えないキリストです。肉眼では見ることができないキリストのお姿を描いているのがこのヨハネの福音書です。

なるほど、なさったことはみんな見える姿ですよ。カナの婚宴の席で水を葡萄酒に変えられたりとか、いろんな御業^{みわざ}が出てきますけれども、それを通して何を語ろうとなさっているかということ。五つのパンと二匹の魚でもって五千人から一万人の人を満腹させられた。それを通して何を語ろうとしておられるのか。

「あなた方は満腹したから、私を捕まえようと来たのか。そうじゃない。本当に神さまの徴というのは、具体的な出来事を通して見えないものを指し示しているのが徴だ。あなた方は目に見えるものにこだわっている。目に見える現象に躓いてはいかん。それを通して神さまは何をあなた方に示そうとしておられるのか。それをしっかりとつかみなさい」

と言われた。そういう形で現象、出来事は書かれていますけれども、それ自体ではなくて、



それを通して神さまの深いみ思い、イエス・キリストという方を通して、我々人間に神さまが知っていただきたいと思っていらいっしやる、それを指し示しているのがヨハネの福音書なんです。しかも、それを本当に受けとらせてくれるのが聖霊である。これが14章から出てくる。

「聖霊があなた方のところに来たらならば、私が語ったこと、したこと、その他さまざまなことを思い起こさせる。それまでは無理なんだ。この聖霊という方によって初めてあなた方は生まれかわって、しかも、神さまのことが手にとるようにわかるようになる」

と。手品みたいなものです。ということは、それがくるまではいかんということですよ、だめだわと。そこに気づくことが大事なんです。

ヨハネ伝は気づいてほしいんです。「目に見えない」ということに気づきなさい。「見える、見える」と言い張っているところがだめなんだと。あの盲人との問答のところで出てきたでしょ。「私に見える、私はわかってる」と言い張っているのが、まだこれは原罪の力強いところです。ということは、自分なんかコテンパンにやられて、もうボコボコにやられて、「もうお手上げです、無条件降伏です!」と。そこから始まる。

私は日本の歴史の中で、武蔵坊弁慶が大好きです。あの荒武者が——牛若丸なんて本当に稚児ちごみたいなものですよ、お公家くげさんみたいなもの——あれに完全に参ったですね。しかも実力で参った。牛若丸は何も叩きもしません。ヒョイヒョイとこちへおいであつちへおいでと踊っているだけで、もう弁慶は薙刀なぎなたを振り回してフラフラになって、「もうあきまへんわ」と、完全に平伏しました。それから、はつきり主君と僕の関係を書きました。あれが義の姿です。

やはり、「誰に出会うか」ということがものすごく大事です。誰に出会うか。弁慶は牛若丸に出会った。人が誰に出会うかによって、その人の生涯が決定される。最も出会いたい人、これは私にとってはイエス・キリストです。イエス・キリストという方に出会っていただいた。私は苦しんで苦しんでいるときに向こうから近づいて来て、

「私だよ。こうべを上げなさい。私だよ」

と言って誘いかけてくださった。こつちに何も希望もないときでしたから。自分を見れば真つ暗です。「ああ、すごい光がきた!」と、すぐにとびついた。私というのは案外、単純でね、飛びついて間違いないと思ったら、もう一直線ですよ。それまでは迷いますよ、いろんなものを迷います。それは当然ですよ、人間として迷うのは当然。でも、「これだつ」と決まったら、まっしぐらです——私は学問の道でも同じでしたね、いろいろ迷った——しかし「これつ」と思ったら。学問の道でもいいお師匠さんに出会いました。だから、誰に出会うかがものすごく大事です。



●別れの言葉

それで今日のところへいよいよ入りたい。14章です。もう皆さん何回読まれましたか。今日のために最近、何回読みましたか。それから、聖書に接してから今までに何回、14章、15章を読んでこられたか。私はもう数限りなくこれを読んできました。いつも帰ってくるところはここなんです。しかも、他の福音書では出てきてない。ここで頂点に達している。これは民族の差別だとか、時間的制約とか、そういうものが全部、取っ払われている。本当に無限無量の世界をそのまま我々に指し示してくれている。

旧約聖書は、非常に民族の歴史だから、そこにはユダヤ的なものがものすごくしみ込んでいて——これは当たり前なんですけれども——躓きになっていました。ところが、ヨハネ福音書はそんなものは何もない。本当に透明です、澄みきっています、今日の青空の空気のようです。そして本ものをそのままに指し示してくれている。しかも、私たちに何を要求していますか。

「私が愛したようにあなた方も互いに愛しあいなさい。これが私の掟だ^{おきて}よ」

と。たった一つです、掟は。もろもろの旧約の掟、それが「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛しあいなさい」と。そのお手本として足を洗われましたね、13章で。そういうように、非常に単純化されている。「私を愛する」とはどういうことか。「私の言葉を守る」ということ。「愛する」というのは、愛する方の言葉、思いを大切にすること、が、「その人を愛する」ということです。それだけだと。非常に単純なんです。

それで、ヨハネ伝14章にいよいよ入ります。まず文語訳で、それからフランススコ会訳で読みます。

「『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。』」

これは口語訳を見たら、非常に楽しいというか、「ははん、なるほどな」という訳が付いている。

「心を騒がせてはならない。あなたたちは神を信じている。わたしをも信じなさい。」

これは味がありますよ。「心を騒がせるな」と、これは一緒です。文語の方では、「神を信じ、私を信じなさい」と。私もそれでずうつと文語でやってきた。ところが、フランススコ会訳を見たら、「あなた方は神を信じている。私をも信じなさい」と。何で味があるかというと、

「神を信じるというのは比較的たやすい」

と、ヒルティは言う。見えないから。「信ずる」と言ったら、信じているか、「あんなものは居るものか、神なんか居るものか」と信じないか。神は有るのか無いのか。「いや、有ることにしよう。なぜなら、こんなでかい宇宙を創るのは、人にはできない。これは創り主が居るはずだ。だから、私は神を信ずる」と。「そんなもの、神なんか居るものか」と。だから、「信ずる、信じない」は別にして、「神」という概念、観念は、わりあい人間にとって、ど



の民族にとっても、たやすいんですね。しかし、何を神にするかは別ものです。別ものですが、でも、「神を信ずるというのは比較的にたやすい」と、ヒルティも言ってます。

今の我々から見たらもうイエス・キリストのなさった素晴らしいこと、それから二千年の歴史の中でイエス・キリストがどんなふうに働いておられるかということとはわかりますから、いいんですけれども。当時の人にとっては、「神さまが人間の形をとって現れている」というのは絶対、受け入れられなかった。神さまは霊でしょ、見えない方、つかみどころのない方だから、「神さま、神さま」と、これでいいですよ。

ところが、この「イエス」という方は、神さまと同性質である。神さまがイエス・キリストの中に100%に現れて、ましてや、

「神と私は一つである。私を見た者は父を見たのだ」

と、こういう形で生きた人間です。生きた人間がどんな素晴らしいわざをしたにせよ、「それが神さまそのものである」なんていう——これを神の現象体と言っている——これを受け入れよという。これはユダヤ人にとってもものすごく厳しい要求だった。「イエスは本当にメシヤか、神から来た者かどうか」と、彼らは旧約聖書から徹底的に調べたわけです。

「ナザレからろくな者は出るはずがない」

とか、「救い主はどこから出てくるということが旧約聖書で言われているか」とか。いろんなことをして、イエスが果してメシヤなのかどうかを、彼らは自分で審判しようとしたわけです。だから、

「あなた方は旧約聖書の中に永遠の生命があると思って一生懸命に調べている。でも、聖書は私のことを証言しているのだ」

とキリストは言われた。そのように、イエスという方が、これが神さまから遣わされてきた方なのかなと。いや、遣わされてきたところではない。そこに神さまが100%に現れた。別な言葉で言いますと、イエスはずして神さまは見られない。イエスにおいて神さまを見るしか、神さまを見られない。イエスぬきに、「神さま、神さま」と言っているのは、頭で思われた神ですよ。

本当にイエスというお方において、神さまが100%に現れたということ素直に受けとること、これがヨハネ伝で言っている「信仰」という事態なんです、もし「信仰」という言葉を使いますならば。「仰ぐ」のではなく、本当にこれは「受けとる」ほうですね。イエスという霊的人格、霊なるイエスの本質を受け入れる。肉体のイエスは見えなくなります。けれども、同一性をもつて霊なるキリストは生きておられる。そういうキリストを神さまからの我々へのお使いとして、しかもご自分をキリストにおいて現しておられる。神さまの御意の体現者。100%に御意を体現している。体で現している。こういう受けとり方をこそ、イエスは願っておられる。でも、弟子たちにはわからない。

このヨハネ伝14章は別れの挨拶、別れの言葉なんです。別れに際して、トマスは言いました。



「あなたはどこへいらつしやるのかわかりません」
それから、ピリポは言いました。

「父をみせてください。そうしたら満足します」
と。トマスに対しては、

「私は道である。我は道なり、真理なり、生命なり。私を通らなければ父の御許へ誰も行けない」

と仰ったでしょ。それから、ピリポに対しては、

「こんなに長く一緒にいたのに、まだわからないのか。私を見た者は父を見たのである」

と言われました。そのように、このイエスという方が神の現象体であり、神の体現者であるということはなかなか、それこそ弟子ですらわからない。これが人間の現実です。ましてや、我々東洋人にとつて、そんなものは、聖書を読んで、「ああそうだ、これなんだ」と、飛びついて受け入れるなんてことは奇蹟です。悩んで悩んで、疑って疑って、「もうしょうがない、降参しました」というところで初めてそれが受け入れられるのかもしれない。その時が早ければ早いほど得ですわ。本当に損得でいえば、早いほど降参したほうが得なんですよ。早く徹底的に、

「ああ、自分の中には生命がない。自分の中には救いがない。自分は神の前に正しくなんかありえない。だから、主よ、助けてください!」

と。「神を信ずる、信じない」とか、そういうことではない。人間として正しい道を歩む。人間として本当にあるべき姿でありたい。これが我々の魂の欲求ではありませんか。どんなに巨万の富を積まれても、空しい虚脱の生活は嫌ですよ。多分、心はすさむ。貧乏だつて何だつていい。本当に人間として

「これが生きてきた証だ。^{あかし}この道を行けば間違いない。どんな姿でも私は幸せだと、本当に心の底から、魂の底から確信をもつて叫ばしてくれる何かがほしい」

と、私はそんな思いでしたね。決して、

「永遠の生命がほしい、復活の生命がほしい」

とか、そんな大それたことは何も思いません。キリストのない、キリストに出会わない私は生ける屍^{しかばね}だった。生きていますよ、勉強もしてます、成績もそこそこあります。けれども、内なる人は死んでいた。喜びもない。だから、一日でもいい、瞬間でもいい、

「本当に私は生きている、私は生きてうれしい、生きていてよかった。100%良かった!」

と言えるような瞬間を持ちたいと思いました。だから、

「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」

と。ところが、このイエスという方に会つてみたら、物凄いものがついてきたんです。



「そんな瞬間に良かった！くらいではつまさんぞ。永遠の生命だ。向こうは輝いている。素晴らしいものだよ」

と。本当に天から無限無量なものが無条件で与えられたという、これが逆転満塁ホームラン、本当です。絶対できない所から物凄いところに入れていただいた。しかも、価は何もない。価なくしてです。これがプレゼントでしょ。プレゼントしてくれる人に価を出したら失礼ですよ。プレゼントは価なしに受けとる。

「お返しは、あなたの生涯は輝いていきなさい。それがお返しだよ」

と。そして、人間界にあつては、

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。仕えられるよりも、仕える者になりなさい」

これだけしか言っておられない。

もう始めの一言葉でずいぶん時間をとってしまいましたけれども、

「あなた方は神を信じている。それはたやすい。しかし、私を信じなさい。私を受けとりなさい。これが本当に信ずるということなんだ。神を抽象的に信ずるのではない。私という具体を受けとりなさい。そうしたら、私の背後にいらつしやる神さまが見えてくるから。私を通らなければ、誰も神さまを見られない、神さまのところに行けない。私は道だよ」

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と。その言葉は何も普遍的に、

「世界宗教の中でキリストしか天国へ連れていってくれない」

とか、そんなことではない。ユダヤの弟子たちの社会の中で——他に異邦の神々がいる——しかし、

「私が信じている神さま、私を遣わされたお方の所へ行く道は、私なんだ。私をぬきにして神さまの所へは行けない」

と。他の神さまの所へは他の道で行くかもしれない。「その他の神さまとあなたの信じている神さまとはどんな関係があるのか」、そんなことは我々の知ったことではない。それは向こうに任せておいたらいい。だから、宗教戦争は絶対になさらないでください。

「仏教の方は真剣に仏教をやってください。くすぶった仏教では、葬式仏教ではダメです。本当に生命を与え、人を救い上げる仏教徒になってください。私はキリストの道で本ものに成らしていただきますから見ていてください」

と私は言う。あとになるほど輝くんですよ。

「外なる人は破るれども内なる人は日毎に新たなり」

と。これは御霊の法則なんです。



●私とあなたは一つ

だから、皆さん、ここにいらつしやる方はかなり私と同じようなご年配の方が多くいらつしやいます。私よりも上の方、あるいは私を追いかけてくる方、いろいろいらつしやるけど、皆さんの共通の告白は、

「外なる人は破るれども内なる人は日毎に新たなり」

と、やがて向こうに迎えていただける日がやってくる。そのことが次に出てくる。

「²わが父の家には住^{すみ}処^かおとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処^{ところ}を備えに往く。³もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

⁴汝らは我が往くところに至る道を知る」

フランススコ会訳で読みますと、

「²わたしの父の家には、住む所がたくさんある。そうでなければ、あなたたちのために、場所を準備しに行くと言ったであろうか。³行つて場所を準備したら、戻つて来て、あなたたちをわたしのもとに連れて行こう。わたしのいるところに、あなたたちもいるようになるためである。⁴わたしがどこへ行くか、その道を、あなたたちは知っている。」

場所を用意しに行くという。我々がこの世を去った時にどこへ行くのだろうか。人はどこから来てどこへ行くのだろうか。行く先をみな知らない。行き先不明。そうでしょ。ところが、キリストはご親切に、

「ちゃんとあなた方のために住まいを用意しに行く。あなた方がこの世を去る時には必ずそこで私が迎えてあげるから。きちんと場所を整えて、そしてあなた方を迎えにやってくる」

と。もうそれはできあがつたんですよ。ここ(14章)では、まだこれから行かれるところですから、これから世を去つて向こうへ行つて、それからのことを仰っているけれども、今ではもう終わった。だから、あなた方は、皆さん、安心してください。

「私が迎えにくるから大丈夫だよ」

「いやあ、イエスさま、忙しいでしょ。そんなにたくさんの方が行くんですから、

疲れませんか」

「疲れないよ」

なんて(笑)。どういうふうになっているか知りませんが、ご自身が迎えに来てくださるのか、御使いたちを遣わして案内してくださるのか。とにかく、もう行く場所は決まっているんです。輝いた場所です。

私は本当に、孫の翔君はもうイエスさまの所へ迎えられて、そこで輝いていると思っている。それしか考えられない。あの不自由な体をぬぎすて、



「お前はよくやった。もうお役ごめんだ。地上での栄光を現した。さあおいで」と言つて、吸い寄せてくださった。そして今は本当に生き生きと引き受けて、それこそ天使となつていろいろ働きをしてくれていると思います。

ですから、ここのところはもう既に成就した。このように、

「行く道はわかっているだろ？」

と言われたら、トマスは

「いいえ、どこへいらつしやるんですか。その道をどうして知るんですか？」

「私は道だよ、真理だよ、生命だよ」

と。これは別々ではない。「道・真理・生命」は三つにして一つだと思ひます。人が踏みしめて行く道。あるいはまた、神さまのもとへ至る道。その道を歩いていくことが義ただしい生き方だと。よく「義しい人は」とか、「義を行ふ者は」とか出てきますけれども、それは、イエス・キリストに従つて行くことが義しい道であり、義の道である。導きに委ねて行くことが義しいんです。導きを離れて、義しいと自分で判断できるものは何一つない——「何一つない」と言つたら言い過ぎかもしれませんが——本当に究極的に義しいとは何か。一人ひとりとつて、人生において義しいとは何か。キリストに導かれてそこを歩むのが、神さまとの関係でも義しい道だと、私は信じています。それはみなお一人おひとり、導きはちがうはずですよ。

「あの人はあんな道へ行つたのに、私はどうなんですか？」

「あなたには、私がちゃんと道を示すから」

と。一人ひとりとつて、キリストという方が道です。その道を歩んでいる時が真理です。そしてその道を歩んでいる時に生命があるんです。道であり、真理であり、生命である。その道・真理・生命を体得したら、もう人生は半分、目的を達したようなものです。あとはその道を行き、御意のままに働くだけです。もう我が思いで働かない。

15章にあります。

「私は真の葡萄の樹き、あなた方は枝。父は農夫である。実を結ばない枝はどんなカットして、実を結ぶ枝だけを残して、豊かな実を結んでいく。それが父の喜びたもうところだ。あなた方は私から離れたら何もできない。」

という。

「あなた方は私から離れたら何もできない」

と言われたら、皆さん、悔しいですか。

「いや、ちよつとはできるんだよ」

なんて。いや、それは嬉しいですよ。

「そうなんですよね、あなたに食らいついたらひとりでに実を結ぶ。あなたからちよつとでも離れたら、何もできない。はつきりしています、ありがとうございます」



「一つでありなさい。私とあなたは一つである。私はお前を捕まえて離さないよ」
と。それが御思いなんです。私の願いもありますよ。でも、キリストの願い、キリストがそれを望んでおられる。キリストが望んでおられることほど確かなものはない。こっちはフラフラする。でも、キリストの御思いは貫きますから。そういうお方に食らいについてもらったら、これは幸せそのものではありませんか。キリストが捕まえて離さない。絶対離さない。ジタバタしたつてだめだ。こんな嬉しいことはない。これが私の告白です。それをこのヨハネの14章が力を尽くして証言してくれている。

●私は無責任だ

まあもう少し読んで行きましょう。

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通つてでなければ、だれも父のもとに行くことはできない。⁷ あなたたちがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。いや、もう今から父を知っており、また、既に父を見たのだ。⁸ フィリポはイエズスに言った。「主よ、わたしたちにお父上を見せてください。それで十分です」。⁹ イエズスは仰せになった。「フィリポ、こんなに長い間、あなたたちと一緒にいるのに、わたしがわかつていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。なぜ、『わたしたちにお父上を見せてください』と言うのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、あなたは信じないのか。わたしがあなたたち言う言葉は、自分で勝手に語るのではない。わたしの内におられる父が、ご自分の業をなさっているのである。」

父が私の中にあつて御業をなさっているのである。イエスの言葉そのものも、父の御業であると。ここまで徹底しているお方は強いですね。

全く無責任です。本当に無責任なんです。

「自分は何もできない。自分から言うことは何もない。全部、父なる神さま、それが私の中で全部なさるんだから、私は無責任だ。神さまがやっているの、私は知らん。神さまが私という空っぽの器を通して存分に働く。私は邪魔をしない。完全に明け放していれば、存分に働いてくださる。だから、私は無責任だ」

と言つてましょ、キリストは。

これはヨハネ伝の中のキリストの言葉で一貫しています。まず「父」ということを仰る。それは私をお遣わしになるお方だ。自分は遣わされた者だと。どこまでも、遣わすお方と遣わされた者という関係がはつきりしています。それから、もうひとつはつきりしているのは、

「決して私をお見棄てにならない。いつも一緒に居てくださる」



と。周りは自分を理解してくれない。理解してないどころか敵対してくる。けれども、「私はいつもその方と一緒にいる。その方は決して私をお見棄てにならない」と、ずうっとそう言い続けてこられた。それだけに、あとで出てきますが、
「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」
と。これは深刻ですよ。

「どんな時も私といつも一緒にいてくださる。絶対に私をお見棄てにならない。私と一緒にいてくださる。私の生命そのものだ。私は何もない。私の中の生命は父なる神さまの生命が充満しているだけだ。道であり真理であり生命であるというのは、神さまご自身が私の中にいらつしやるから、そうなんだ」

と。そこまで神さまをお立てになっていた。そのお方から、

「お前なんか知らない！」

と蹴飛ばされて、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と。これは本当に深刻です。「始めから十字架で棄てられるのはわかっているではないか」なんて、これは理屈ですよ。本当にその時に、

「神さま、本当にお棄てになったんですね！」

という、思わず迸り出た叫びではなかったかと思う。いろんなことを、皆さん、ご自由に想像なさっている。「これが決定版」というのは何もないと思います。それこそ、向こうへ行つて、

「イエスさま、あの時のお言葉は何でしたか？」

と聞くまではわかりませんよ。皆さん、ご自由にお受けとりになつたらいい。自分をイエスキリストの身に置いて、そしてあのように従いきつて100%、神さまに従われた。

「世の人がどんなに私を棄てても、神さまはお棄てにならない。いつも一緒にいてくださる。だから、寂しくない」

と。そう言っておられたお方が、なぜ、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と叫ばねばならなかったか。これが結局、十字架です。

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。それができないなら、業^{わざ}そのものによって信じなさい。¹²よくよくあなたたちに言うておく。わたしを信じる人なら、わたしのしている業をその人も行い、また、それ以上の業を行うであろう。わたしが父のもとに行くからである。」

さあこれは、皆さん、どんなふうにお受けとりになりますか。

「そんなものできませんよ。イエスさま、あなたのなさっていることよりもっと



でかいことをするなんて、そんな無茶な」
と。これが普通の答えです。「ああ、やったるぜ」なんて全然言えませんか（笑）。これは何でしょうか。

「私が父のもとに行くから、十字架を通って贖いわざを終えて父の御許に行く。そうしたら、聖霊という姿でお前さんにくつつく。お前さんに聖霊という姿で乗り移ったならば今度は、私がお前を通して凄いことをする。お前さんではない。お前さんを通して私が凄いことをやる。今よりもっと凄いことをやるから」

と、そう受けとる。だから、それは私の業ではない。私を通してイエスさまが働かれる。今までは分離されていました。離れていました。それが今度は、密着してくれる。本当に密着して一つになってくださる。嬉しくありませんか、皆さん。密着して一つになってくださる。それは何もからだで感じるとか、そんな感覚的なものに頼ったら、これはまた蹟きになります。

「そう約束されたんだから、そうなんだ」

と、そう思ってください。イエスの約束の言葉に偽りは無い。あそこまでのことを仰ってくださいったんだから。

「いや、あれは弟子に仰ったんでしょ。私は弟子ではないから」

なんて。それは違う違う、私たちはみんな弟子なんです。みんな弟子です。「友である」と言ってください。た。「しもべ」ではない。友であると。

「あなた方は友である」

と言われた。讃美歌312番に「いつくしみふかき友なるイエスは」とある。あまりイエスさまを神さまに祭り上げて、「畏れ多い、尊い」といつて遠ざけてはだめです。「友だ、一緒にいてくださる」と言う。ありがたいお話です。

神さまというのは遠いところにおられて、我々はつかみどころがない。そのお方が実に我々に身近く来てくださって、しかも「友」と呼んで一緒になって歩いてくださる。旅と一緒にしてください。これはなかなか得難いことではないでしょうか。どこの宗教でそういうものがあるんだろうかと、私は思う。

イエスという方は神さまを「父よ」と呼ばれた。「父なる神さま」と。しかもそれは「霊なる神さま」です。サマリヤの女性との対話の中で

「神は霊である。だから、拝する者も霊と真理をもつて拝しなさい。あの山で

もこの山でもない」

と。お寺の中でも教会堂でもない。いや、教会堂でもいいんですよ。至る所、霊と真理をもつて礼拝する。その場所が教会であり、礼拝堂なんだということなんです。場所的限定はない。だから、ここは立派な礼拝堂です。ここにキリストが臨在してくださる。皆さんに身親しくそばについていてくださる。助け主が背中に手を按いてくださって、



「お前と私は一つだよ。お前を愛しているんだから」と。そういうお方が身親しくしてください。

実はキリストご自身はそういう姿で神さまと交わっておられた。

「夜を徹して祈られた」

とかいろいろ出てきます。

「独りこつそり祈りに行かれた」

とか。まさに父なる神、霊なる神、そのお方と一つの姿でいらつしやる。その父なる神、霊なる神とあのイエスが一つであられるように今度は、

「あなた方と私はその関係に入る。あなた方と私がその関係に入ると、それを追っかけるように父なる神が一緒にいてくださる。だから、父も私もあなたも三者一体。聖霊という姿でそれが成就する。聖霊という姿でお前の中に宿る」

これが14章、15章の約束なんです。だから、もう少し読んでいきます。

●今や全部成就した

「¹²誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。¹³汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。

¹⁴何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。」

口語訳の方で見ますと、

「¹²よくよくあなたたちに言っておく。わたしを信じる人なら、わたしのしている業をその人も行い、また、それ以上の業を行うであろう。わたしが父のもとに行くからである。¹³そして、あなたたちがわたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。¹⁴わたしの名によって何かわたしに願うなら、わたしがかなえてあげよう」

それから次のお話に移ります。

「¹⁶われ父に請わん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。¹⁷これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。¹⁸我なんじらを遣して孤兒^{みなしご}とはせず、汝らに^{きた}来るなり。」

口語訳で見ますと、

「¹⁵あなたたちがわたしを愛しているなら、わたしの掟を守る。¹⁶わたしも父にお願いしよう。そうすれば、別の弁護者を遣わして、いつまでもあなたた



ちと一緒にになるようにしてください。17 真理の霊、その方を、この世は、見ようとも知ろうともしないので、受けることができない。あなたたちはその方を知っている。その方があなたたちのもとに留まり、あなたたちの内におられるからである。」

ここで、「助け主」「聖霊」「真理の御霊」を

「その方を、この世は、見ようとも知ろうともしないので、受けることができない」

と。これはそのとおりです。ところが、その次の

「あなたたちはその方を知っている。その方があなたたちのもとに留まり、あなたたちの内におられるからである。」

と、これはちよつと先走った話ですね。当時ではまだ弟子たちにはわからないことです。これは「必ずそうなるよ」という約束です。

「この方をあなたたちは知るようにになる。その霊があなたたちと一緒におり、なかにいてくださるようになるからだ」

と。それは今はできない。私たちはこの福音書を読みます時に、その当時に自分の身を置いて「弟子の一人になった思いで聞く」という聞き方と、それから、今という現在において「もう成就した、だからこうである」という、二つの読み方をしてください。身を向こうに置いて「まだこれからだ」と、それではだめです。その当時はそうだ。ところが、「今やそれは全部成就したから万才！」と読まなければ、キリストは嘆かれますよ。

「わたしは、あなたたちを孤児^{みなしご}にはしておかない。あなたたちのところに戻つて来る。19 もう少しすると、この世はもはやわたしを見なくなるが、あなたたちはわたしを見る。わたしが生きており、あなたたちも生きるからである。」

この所の所もいいですね。

「18 我なんじらを遣して孤児^{みなしご}とはせず、汝らに^{きた}来るなり。19 暫くせば世は^{また}復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。」

これはご復活のことだと思えます。この世の人たちからは、キリストの姿は見えなくなる。けれども、あなた方、信じている者たち、弟子たち、イエスを慕う者には必ず復活の主さまがご自分を現してください。

「五百人以上の人に現れてきた」

とパウロは言っています。

この世の出来事というのは、信ずると信じないにかかわらずテレビを通して見られる。客観的に科学の世界、サイエンスの世界は。ところが、この神さまの世界というのは、見える人には見えて、見えない人には見えないという、物凄くそこには差別がある。不思議



でしょ。イエス・キリストというお方を見てても「なんだ、大工の子じゃないか。ただの赤ちゃんじゃないか」というふうな見方をする。しかし、シメオン老人のように、

「ああ、この方こそ救い主。あなたにお出会いするために私は今日まで生きてきた。もう役割は終わりました。今こそ安らかにゆかしてください」

と。同じ一人の赤ちゃんを見ていても、そんなふうに違うでしょ。ましてや、霊の次元になると、本当にこれは違うんです。

パウロは白昼、キリストの光に撃たれてぶっ倒されました。大きな音がした。何だか声が聞こえた。しかし、誰もわからない。ところが、パウロには、

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

とはつきり聞こえてきた。そんなふうには、同じ一つの現象的なことが現れましても、それを受けとる受けとり方は人によってみんな違う。

復活のイエスがいろんな方に現れられるけれども、すべての人に現れたかというところではない。その辺もおもしろいところなんです。いや、我々にも現れてほしいんですよ。トマスのように、やっぱり見たいですよ。見てくださいという、我々の欲求ですよ。「イエスさま、あなたのお姿を見せてください」と。まあ時がきたら見せてくださるでしょう。

「見ずして信する者は幸いなり」

とキリストは言われた。復活のあとに。

「俺は絶対に信じない」

と、トマスはがんばったでしょ。そしたら、一週間後にイエスは現れた。

「さあ、この釘あとに指をつっこんでごらん。脇腹を触ってごらん」

「もう、勘弁してください」

と。あの場面はすごく楽しいですね。

つまり、人間というのはそんなものだ。はつきり肉眼で見て、手でつかまえて、初めて「信する」ということができる。ところが、神さまの世界というのは、この三次元ではないんですから、これはしょうがない。その信ぜしめてくださるのが聖霊なんです。ここに救いがあります。「私は信じられない人間だ」と。当たり前です。信じられないのが当たり前。天の次元のものは天の次元が、天のお方が示したもう。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。人あらたに生まれずば、神の国に入ることができない」

と。みんなそうなんです。別次元の世界のことを言っておられるから、それをこの次元に、我々の三次元の感覚で受けとろうと思ったら、そこに食い違いが生ずる。そこに衝突が起こる。だから、

「ああそうなんだ。神さまの世界のことは神さまだけがお示しくくださる。それを聖霊というお方が我々にやってくださる」



と。イエスが生きておられる間は、イエスの中に神の霊が働いて素晴らしいことをなさった。けれども結局、人は受けとれなかった。今度は、向こうへ行かれたら、聖霊という姿で帰ってきて、一人ひとりの中に宿ってください。

「いや、イエスが生きておられる時は宿れなかったのに、なんでイエスが向こうへ行かれたら宿れるのですか」

と。それはこれ（十字架）があるからです。ここで我々の原罪そのものが全部片づいているから。もう片付いている、もう終わってしまったんですよ。いいですね。終わったんですよ、これからではない。もう終わったんです。

「わがこと終りぬ」

と仰ったでしょ、十字架の上で。

「その時、聖所の幕が真つ二つに裂けた」

と書いてある。旧約の世界で、新約の霊の世界を閉ざしている厚い幕がありました。その聖所の幕が真つ二つに裂けた。至聖所への道がドーンと開かれたわけです。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

という道がドーンとそこに開かれた。だから、もうそれはできあがつて完了している。元へ戻らない。不可逆的という。もう戻らない。だから、皆さん、どんなに逆らっても、もう終わつたんです。もう生命の世界が来たんです。これが福音です。

「時は満ちた。神の国は近づいた。だから、180度引っくり返って、この私を、生命を受けよ」

と、これが成就した。ガリラヤをお発ち^たになつてからですが、けれども、今やそれは成就してしまつた。だから、引っくり返つてそれをすつと受けとる。

「もう私の胸の中も開けています。そこへすつと入ってきてください」と。これが御意なんですよ。

「御意が天に成るように、地にも成らしてください」

と祈ります。御意は今、成っているんです、そのような形で。いよいよ成ってください。いよいよ聖霊の主さまが働いてくださる。

「もう、私は自分のことなんか問題にしません。開き直りましたから」

「よし、よく開き直つたね。開きつばなしでいいよ」

と。本当にそれを絶対にイエスさまと一対一でやってくださいよ。

「イエスさま、もう絶対にあなたと私は一つなんです。あなたのプロポーズをお受けします」

と。そうでしょ。イエスのほうからプロポーズをしてくださったんです、我々一人びとりに対して。それは命懸けの愛なんです。十字架に命を懸けたでしょ。

「その愛がわからないのか」



と、迫ってくださっているわけです。

「いや、こんな汚れた者が」

「そんなこと言うな、言うな。ここ（十字架）であなた方は既に潔い。すっかり潔い。今日の空のように澄み渡って、太陽の光が燦々と一人ひとりに注いでくる。それが成就している」

「絶対にあなた方を孤児にはしない」

と仰ったことがもう成就した。だから、今はそういう聖霊の時代なんです。ここから先、いつ新天地の到来、神の審判があるかは我々にはわからない。イエスさまも御存知ない。でも、私たちに大事なものは、そのようにして既に成就したお約束、一人ひとりの中にキリストが宿ってくださる。そして生涯離れない、一緒に歩んでくださる。それは神さまのみ思いなんだから、御意なんです。それから、それは貫くんです。御意は貫いていきます。それに「はい」と応える。それだけです。非常に単純でしょ。

その先へ行きます。

「²¹わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし」²²イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』²³イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともにせん。²⁴我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くとこの言は、わが言にあらず、我を遣し給いし父の言なり。』

²⁵此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、²⁶助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。²⁷われ平安を汝らに遣す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、なんじら心を騒がすな、また懼るな。』

口語のほうで見ますと、

「このようなことを、わたしはあなたたちと一緒にいる間、話してきた。だが、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊、その方がすべてのことをあなたたちに教え、わたしが言ったことすべて思い出させてくださる。わたしはあなたたちに平安を残す。わたしの平安をあなたたちに与える。この世が与えるようには、わたしは与えない。

世は平安を与えることはありませんね、そもそも。

心を騒がせることはない。恐れることもない。『わたしは去って行くが、あなたたちのところに戻って来る』と言ったのを聞いたであろう。もしわたしを



愛しているなら、わたしが父のもとへ行くのを、あなたたちは喜ぶはずである。父はわたしよりも偉大な方だからである。事が起こったときに、あなたたちが信じるように、今、事の起こる前に言うておく。もはやあなたたちと多くを語るまい。この世の支配者が来るからである。だが、彼はわたしに対して何の力もない。しかし、わたしが父を愛しており、父のお命じになったとおりに行っていることを、この世は知らなければならぬ。立ちなさい出かけよう」。

これで一端、お話は終わつたようなんです。ところがまた15章でずうつと続くんですね。まだまだ言い足りないと思つて続けられたのか、どういふふうになっているのかわかりませんけれども。一端この14章で、「さあ、ここから出かけよう」と言われる。

●葡萄の樹と枝

そして、15章。本当にこの15章はまたピークですよ。ピーク中のピークです。

「¹我は真の葡萄の樹^き、わが父は農夫なり。²おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔め^{きよ}たもう。³汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。⁴我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。⁵我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも為し能わず。⁶人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。」

口語のほうで読んでみます。

「¹わたしは真のぶどうの木であり、わたしの父は栽培者である。

「農夫」というのをフランススコ会訳では「栽培者」、^{えんてい}園丁、^{そのもり}園守と訳している。

²わたしに付いていて、実を結ばない枝はすべて、父がこれを切り取られる。しかし、実を結ぶものはすべて、もっと豊かに実を結ぶように、父がきれいに刈り込まれる。³わたしがあなたたちに話した言葉によって、あなたたちは既にきれいになっている。⁴わたしの内に留まっていなさい。そうすれば、わたしもあなたたちの内に留まっている。

「留まる」という訳はとても素晴らしい訳です。ギリシア語では「メネイン」という言葉です。留まる、居候する、^{いそろう}出て行かない。文語では「居る」という言葉を使っているけれども、この「留まる」というのはとてもいいと思います。

「実を結ばない枝は父がこれを刈り取る」

という。葡萄の栽培の場合にはきつと、いろいろ剪定^{せんてい}したりするんでしょう。けれども、



クリスチャンというのは、本当にキリストに繋がっていると、無駄なものを出てこないはずなんです。キリストに繋がっていて、無駄なものがそろそろ出てくるようでは、半分繋がってないようなものです。「あつ、これは切り取られるのではないか」とか、心配なさいないでください。放っておいたらいいですよ。自然に消えていきますから。

「こんないろんな無駄なものがあるのは、私はまだ不信仰なんだわ」

なんて思ったらいけませんよ。キリストに食らいついていたら間違いない。キリストは捕まえたらずに離さないから、それで全部もう終りなんです。完全勝利なんですよ。

ですから、これは葡萄の木と葡萄の枝の譬えで仰っているから、こんなことが出てくるだけのことで、大事なことは、

「私に留まりなさい」

ということです。

「ぶどうの枝が木に付いていなければ、枝だけで実を結ぶことはできない。それと同じように、あなたたちもわたしの内に留まっていなければ、実を結ぶことはできない。⁵わたしはぶどうの木であり、あなたたちは枝である。人がわたしの内に留まっており、わたしもその人の内に留まっているなら、その人は多くの実を結ぶ。わたしを離れては、あなたたちは何もすることができないからである。⁶わたしの内に留まっていない人があれば、木に付いていない枝のように、外に投げ捨てられて枯れる。そして、かき集められ、火に投げ入れられて燃えてしまう。

ええ、なんとも寂しいことが起こりそうな話ですけども、絶対に、食らいついていたら間違いない。こんな酷いことを言われることは何もない。私だったらこう言います。

「私は何もできません。はつきりします。あなたを離れてできるはずがありません。だから、あなたにくっついていたい。離れないように、あなたは接着剤です。

瞬間接着剤でもうくっつけてくださっただけですから、離れようにも離れられないではありませんか」

と。しかも、同じ樹液が流れているから。葡萄の本体と葡萄の枝は、同じ樹液が流れている。我々だって、この血液は脊髄かどこかで作られて、心臓から送り出されて、動脈と静脈があつて、体の中をグルグル回っていて、指先の端まで流れてくる。だから、切られれば血が流る。そのように、本体からこの枝を切ればだめです。単なる物体になつてしまう。ところが、くっついていれば、これは本体と同じことをいくらでもやる。「手となり足となる」とよく言いますね、「手足となつて働いてくれよな」と。そのように、本体であるキリストさまと私たちは切つても切れない絆^{きずな}で結ばれている。友情で結ばれているといたしますと、もうキリストを離れた自分はありません。どんなときでも、キリストが私を通して御業^{みわざ}をなさる。それだけの思いで私たちを選んでくださった。



「あなたが私を選んだのではない。私があなた方を選んだ。そして弟子にした。そして豊かな実を結ぶようにと送り出したんだよ」

ということが出てきます。そういう自覚を、どうぞ皆さん、持つてください。主が私を選んでくださった。私が選んだのではない。それなら、選び給うた方は最後まで責任を持つてくださる。みんなナンバーワンなんですよ。その選びにお応えすれば、任せていけばいい。京都はまだ人間は少ないんですよ。東京に来ると、人間が多いこと。その中で皆さんは選ばれた方なんです。これは奇蹟ではありませんか。本当にそう思ってください。東京1100万人の中で皆さんは本当に選ばれなされた。本当に渺々たるものです。それがこの会堂の中にこうやって生命の御言、みことばキリストの御言を、聖霊の言葉をダイレクトに水を割らないで、そのまま受けとれるというこの集まりは本当に奇蹟ですよ。私はそう思います。キリストは父なる神さまを父神・霊神として崇められた。あが我々はイエス・キリストというそのご人格、霊的人格を、ちょうどキリストが父を崇められたように、キリストさまを崇めます。しかも、そのお方は高いところに留まっておられる方ではなくて、地にくだつてきてくださった、遣わされてきてくださった。そして、私たちを抱きとつて、父のみもとに帰られたもう。地上にある限りはいつも一緒にいてくださる。この恵み。

律法はモーセを通して与えられた。恵みと真、まこと神さまの恩恵と真理、慈しみ、それはイエス・キリストという方を通して、我々に無条件に無限無量に示された。これを受けとつてもらえば、もはや神の子である。ヨハネ伝第1章に、

「彼を信する者は、血筋によらず、神の霊によって神の子となる。そういう特権を賜ったのである」

と、出てきます。そのように、皆さんは物凄いことをしていただいた。驚いて目玉が飛び出るくらいになっていいんですよ、本当に（笑）。皆さん、まだ驚き方が少ない。「ヒエーッ！」と、やつてもらいたいよな、「福音とは凄いんだ！ ヒエーッ！」と。そのくらいにやつてくださいよ。

「喜べ、喜べ。天におけるあなた方の報いは大いなり」

と。これは迫害されたら、「喜べ」と言われた。まだ迫害はされてませんよ、私なんかは。でも、本当に「喜べ、喜べ」と言つてくださった。

「喜びを与えた、平安をあなたに与えた。永遠の生命なんだ」

と。すべての真理へとこの聖霊というお方が導いてくださる。真理の御霊なんです。

私は学者でしょ、やはり「真理」という言葉に引かれる。本もの、いつになつても古びないような「本もの」、それへと導いてくださる。学問の世界では、たえず後の人がそれを超えて進むのはしょうがない。でも、やはり学問する上でキリストさまに導かれているというのは物凄く幸いなんです、私にとつては。邪念がなくなる。人の名声とか、何だとか、人がどういう評価をするかとか、そういうものから離れたところに生きていける。



そういう強さがあります。ぶれない。皆さん、どの道でもそうだと思います。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と仰った。このお方と一つであるならば、ぶれない人生を歩んで行ける。そして、自分を偽る必要はない。知らない事は知らない、はつきり言っている。

「自分を賢いと思っ**て**はいかん」

と箴言の3章にあったでしょ。あれは私の得意中の得意です。

「わしアホでんねん、バカでんねん」

と（笑）。そうやって、自分は本当に知るべきことをこれっぽちも知ってないと、それくらいに思っ**て**いたら楽ですね。そして、必要なことは聖霊が示したもう。身軽でいい。詰め込む必要はない。そういう在り方ができる。

●わが愛の中に居れ

15章をもう少し先へ行きましょう。

「7汝等もし我に居り、わが言^{ことば}なんじらに居らば、何にても望みに随^{したが}いて求めよ、さらば成らん。8なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。」

「7あなたがたがわたしの内に留ま**つ**ており、わたしの言葉が、あなたがたの内に留ま**つ**ているならば、望むものを何でも願いなさい。そうすれば、かなえられる。」

ヒルティは、

「新約聖書の中でこれが一番素晴らしい言葉だ。これが本当ならもう恐いものはなくなる」

と、そこまで言ってますよ。あの『眠られぬ夜のために』（上）の1月2日に書いてます。それには条件があります、

「私に留ま**つ**ているならば」

という。これですよ、これ抜きにして願ってもだめです。

「私（キリスト）があなたと一緒なら、あなたと私が一緒ならば、そうしたら、願**い**事はみな私の願**い**にな**つ**てしま**う**」

と。「私の」というのは「キリストの」ということ。キリストの願**い**をあな**た**は願**う**。そうしたら、ならざるを得ない。これを表面的にと**つ**て、「そうか、キリストと一緒**に**いて、百万円くれと願**つ**たら、パツと百万円が出てくるのか」と（笑）、そうはいかんですよ、そんなことはない。キリストと一緒ならば、キリストの願**い**がわが願**い**になる。わが願**い**とキリストの願**い**が一致する。そうしたら、それはならざるを得ない。

だから今度は、私たちはこう受けとる。「一緒なら、一緒ならば」ではなくて、



「私とあなたは一つですね。あなたの願いを私の願いとしてください。そうすれば、どんなことでも成っていきます。ハレルヤ、アーメン！ 万才！と、日々そのように生かしてください」

と。「もし、これならば」なんて全部だめ。「こうなっています。だから、こうです」と、断定的に受けとっていく。そうでしょ。それ以外の受けとり方はないではありませんか。もう、事は成ってしまったんですもの。今現在、我々が受けとるときに、全部「ならば、ならば」なんて、そうじゃない。

「もうこうなっていますね。そうですね。だから、こうですね。ハレルヤ、アーメン！」

と。そうですよ、そうしたら力がきます。キリストの保証がありますから、大丈夫です。そうしたら、実を結ばざるを得ない。そして、実を結ぶということは神さまの栄光となる。そして、私たちは本当にキリストのお弟子だということが胸をはって言える。

「⁹父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。」

私はこの言葉が好きなんです。「父の我を愛し給いしごとく」と、キリストほど神さまに愛された方はいらつしやらない。直接的に愛を受けて、抱かれたのはキリストお一人。今度は、「その愛で私はあなたたちを愛した。だから、その愛の中に留まるんだよ」と。

「父が私を愛したように、私もあなたたちを愛してきた。私の愛に留まりなさ

い」

と。「愛の中に居れ」と仰つたら、「はい」と言つて居つたらいいんですよ。出て行くことは何もないではありませんか。よく、ドラマで「出て行け！」とかやっていますね。

「俺の言うことが聞けなかったら出て行け！」

「それなら、出て行くわよ！」

とかやっていますね(笑)。ああいうことを聞くと、あの人たちは結婚式で何を誓ったのだろうかなんて思う。

「汝、この誰々を病める時も健やかな時も愛するか？」

「はい、誓います！」

なんてやっています。それがしばらくしたら、「出て行け！」「出て行くわよ！」なんてありますけれども、キリストとの間では絶対にそんなことはありません。そうでしょ。

「⁹父がわたしを愛してこられたように、わたしもあなた方を愛してきた。わたしの愛に包まれて常にいきなさい。¹⁰あなたたちがわたしの掟を守るなら、わたしの愛に包まれて常に生きることになる。わたしが父の掟を守って、父の愛に包まれて常に生きているように。」

「御言を守っている」ということと、「愛に留まる」ということは一つだ。「愛に留まる」ということは「御言を大事にする」ということ。「昼も夜もこれを思う」とありましたね。



「11わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたたちのものとなり、あなたたちの喜びが満ち溢れるためである。12わたしがあなたたちを愛したように、互いに愛し合うこと、これがわたしの掟である。13愛する者のために命を捨てること、これ以上の愛はない。14わたしが命じることを行うなら、あなたたちはわたしの愛する者である。15もう、わたしはあなたたちを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか、知らないからである。わたしはあなたたちを『愛する者』と呼ぶ。父から聞いたことはすべて、あなたたちに知らせたからである。16あなたたちがわたしを選んだのではなく、わたしこそあなたたちを選んだのである。わたしがあなたたちに使命を与えたのは、あなたたちが出かけに行き、実をみのらせ、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたたちがわたしの名によって父に願うことは、何でもかなえていただけるようになるためである。17あなたたちが互いに愛し合うこと、これがわたしの命令である」。

まあなんと有り難いお言葉でしょうか。もうこれは註釈も何も要らない。「はい」とそのまま100%にお受けとりになってください。

「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」

と。それから今度は、世との関係です。

「18もしこの世があなたたちを憎むなら、あなたたちよりも先にわたしを憎んだと知るがよい。19もしあなたたちがこの世に属していたなら、この世はあなたたちを自分のものとして愛したことであろう。だが、あなたたちはこの世に属しているのではなく、わたしがあなたたちをこの世から選び出したのだ。それだから、この世はあなたたちを憎むのである。20『僕は主人に勝るものではない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。わたしを迫害した人々なら、あなたたちをも迫害するであろう。わたしの言葉を守った人々なら、あなたたちの言葉をも守るであろう。21しかし、人々は、このようなことをすべて、わたしの名を信じたということ、あなたたちに行うであろう。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。22わたしが来て、彼らに話さなかったなら、彼らには罪はなかったであろう。だが、今は、自分の罪について言い逃れができない。23わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいるのである。24ほかのだれも行わなかったような業を、もしわたしが彼らの間で行わなかったら、彼らには罪がなかったであろう。だが、今、彼らはその業を見た上で、わたしと父とを憎んでいる。25しかし、これは、『人々は理由なしにわたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が成就するためである」。



ずっとヨハネ伝を見てきました。イエスの言葉、イエスのなさった事、それに対する人々の反応をふり返ってごらんになりますと、いかにこの言葉が本当かということがわかります。それは父をも本当のことも知らないからであると。ある意味では止むを得ないことでもありますけれども、しかしそれは、イエスにとつては非常に辛い悲しいことです。語っても語っても、いくら御業を顕しても、彼らは受けとろうとしない。頑固に自分の考えに固執して、自分の判断でイエスを裁こうとする。これがずっとヨハネ福音書の1章の途中から12章あたりまで、イエスの歩まれた道での人々との、特に宗教家たちとの遣り取りにはつきり表れています。そう思いますと今度は、弟子たちである私たちにおきまして、この世の人たちが本当の意味で神さまのことを、本当の意味でイエス・キリストのことを知らなければ、同じ態度をとるだろうということをここで知ります。

だから、クリスチャンは孤独ですよ、その意味では。この世に友を作ろうと思っても壁がある。あるところまでは親しく仲良くなれます。でも、超えられない線がある。非常に孤独を感じることがあります。そのときにこういうキリストの言葉を思い出していたきたい。孤独でしやうがないと。イエスは本当に孤独でした。けれども、

「父は私と一緒にいてくださる。父は決して見捨てられない」

と何度も、7章、8章のあたりで仰っています。そのように、私たちはこの世を愛するけれども——イエスも世を愛された——でも、そこに大きな溝がある、壁がある。乗り越えられない。破られない。それが今も、我々と我々をとりまく世間というものの中に、大きな溝があり、壁がある、淵がある。これは覚悟してください。でも、その壁の向こうの人が、ピヨンと壁を乗り越えて、溝を飛び越えて、こっちの陣営に来て、お互いに理解し得てわかり合えたら嬉しくてしやうがないということです。

「二人の罪びとが悔い改めたら、天において、悔い改めを要しない99匹に勝つて喜びがある」
まさ

という、羊の例え話がある。100匹の羊がいて1匹が迷っていて、そしたら99匹を放っておいて、谷底まで行ってその羊を抱き抱えて登ってくる。さあ喜んでくれと。神さまから見たら、この世の人はみなかわいい。

「彼らを赦してやってください」

と、キリストが祈られたように。みな神の子なんです、本来。本来、神の子なんです。それが失われた神の子です。その失われた神の子を取り戻してくる。これがキリストの御業みわざだった。弟子たちに遣わされた使命だった。ところがなかなか、その壁が厚くて、それが破れない。イエスの時代にもイエスは、

「この火既に燃えたらんには何をか望まん」

と言われた。そのくらい大変でした。今だって、聖霊の時代だといって、聖霊が一人ひとりのクリスチャンにくつついて燃えてくださるといっても、非常に少数であります。滔々とうとう



たる世の流れは、我々をあざ笑うかのような流れで世は動いている。

「しかし、勇気を出しなさい。あなた方はこの世の悩みや患難がある。けれども、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている」

と、16章のお終いに出てくる、最後の言葉です。それから祈られる。

●永遠の生命をいただく

そういうふうには、皆さん、クリスチャンになるということは非常に幸せなことです。幸いなことに、永遠の生命をいただく。神さまと通々の間柄になれる。でも、この世との関係が非常に辛い選択を迫られているということです。その両面があるということをぜひ、お忘れにならないでください。いろんな試練がやってきても、それを異なることとして怪しまないで、

「試練が降りかかれば降りかかるほど喜べ」

と、ペテロ書にありましたね。だから、本当に神の国が成るまでは、その中を我々は歩まされる。だから、「互いに愛し合いなさい」とキリストは仰つてくださったんだと思います。そしてそれが段々大きくなっていく。

「一粒の麦、地に落ちて死なずばただ一粒である。しかし、死なば多くの実を結ぶ」

と。クリスチャン一人びとりは己に死んで多くの実を結ぶように召されている。

「人その友のために命を捨てる」

と言いましても、簡単に命を捨てるものではありません。己に執着しない。己のことはさておいて、友の救いのために身を献げるといふ、そういう気持ちです。損を承知で飛び込んでいくという気持ち。ソロバン勘定をしない。それが「捨身^{すてみ}」ということ。よく「捨身」といふと、何か谷底に身を投じるようなことではない。己に執着しない、己のことは思わないということ。キリストのお姿がそうでしょ。ご自分のことを何も求めておられない。与えて与えてやまない。

「与うるは受くるよりも幸いだ」

と言われた。与えて与えてやまない。そうすると、いくらでも入ってくる、あとからあとから。

「人は自分の測る量りで測られる」

とありましたね。価なく与えているものに、どんどん神さまはあと補填^{ほてん}してくださる。豊かになる。不思議な法則が働くんです。だから、

「己を大切に守る者は己を失う。己を捨ててかかる者は永遠の生命をいただく」

と。全部逆説的なパラドックスが本当の真理なんです。そういう真理に出会うだけでも喜



びがあるでしょ。

世にはいろいろな処世術があつたり、人々を生かすたくさんの言葉というのが編纂^{へんさん}されたりします。それもいいですよ。いいですけども、福音書の中に物凄い生命の言葉がキラキラ輝いている。砂金のごとく輝いている。それを一つ一つ拾いだして、ニコニコ、ニコニコしてメモをとっている。私も小さなカードを持ってまして、カードの中に御言を書き込む。皆さん、楽しくなさってくださいね。そして終りのところですよ、

「²⁶父の許^{もと}より我が遣^{たすけぬし}さんとする助主^{たすけぬし}、すなわち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証^{あかし}せん。²⁷汝等もまた初^{はじめ}より我とともに在りたれば証するなり。」

いかにこの助け主、聖霊というお方——この時代にあつてはまだこれからの話です——しかしながら、それがすべてのことを成してください。キリストの分身^{ぶんしん}です。この時は、キリストはイエスという姿でまだ地上におられる。神さまは天界におられる。そして、自分が十字架を通つて天へ行く。そうすれば、この助け主、聖霊を遣わしてください。この助け主、聖霊は、実は天界に行かれたキリストご自身が分身となっている、キリストご自身の分身です。私はそう思っています。

孫悟空の「分身^{わけみ}の術」というのを御存知ですか。孫悟空が自分をいくつにも分けていく。どこへ行つても孫悟空がいる。どれが本当の孫悟空かわからないという「分け身の術」。金太郎飴も切つていけば、同じものができましょ。

「この頃の答案は金太郎飴みたいだ。どの答案も同じだ。ある本の丸写しだ」

と、よく先生方が言う。そうじゃない。キリストはご自分をスライスのように切つて切つて、五千人のパンを切つて分かち与えた。ご自分をスライスのように切つて分かち与えた。しかも、キリストはなくならない。天界にいらつしやるキリスト。そして、分身、分霊となつて降^{くだ}つてくださるキリスト。同じお方なんです。

内なる御霊が、「わが父よ」と呼ぶ。天界にいらつしやるキリスト、そして父なる神さま。いわば聖霊は、我々地上における受信基地、天界の消息を受けとる受信基地です。ここで天界と通信ができる。そういう事態ができあがっている。もう成っているんです。しかも、日々新たに。放つておけば入ってきますから。絶えず絶えず新たにしていかなければいけない。それが「日々の祈り」ということでしょうね。

祈りも形式ではありません。本当に心の中で、

「主さま、お祈りします。主さま、ありがとうございます。主さま、あなたは私と一つになると約束してくださいました。その約束は成就しているんですね。ありがとうございます。私は嬉しいですよ」

と。私はだいたい、お風呂の中で祈っている。お風呂の中で、それこそ裸の付き合いです、キリストさまと。誰もいないからね、一番落ち着くのはお風呂の中です。ゆつたりとそこ



で主に祈るんです。とにかく、一人でいる時にそうやって心の中で祈ればいいんです。

「隠れたところを見ておられる隠れた父に祈れ」

と、キリストは言われたけれども、イエス・キリストは我々が「主よ!」と呼ぶのを待っておられる。「主さま!」と一言でいい。

そういう「一つ」ということ。こんなふうに生まましく展開してくれているのがヨハネ福音書です。だから、旧約があつて、共観福音書があつて、そしてヨハネ福音書で本当にこの霊の次元、天の次元を聖霊というものによって、

「聖霊が鍵だよ、これがキーポイントだ。聖霊が来てくだされば、すべて教える。聖霊が来てくださるまでは何もわからない」

と極端に言えば、天界のごとく、この世のことがわかる。

「神さまに関わる事柄が本当にわかりました、本当にそうです、納得しました」

と言わせるのは聖霊だと。だから、

「聖霊は何ものにも代えられない」

と、これは小池先生から嫌というほど聞かされた。

「聖霊ほどありがたいものはない。皆さんそうじゃないですか。私は聖霊を受けましたから」

と、凄く聖霊のバプテスマを受けられた。あれは躓きでしたよ、みんな

「自分もああいうふうにならないといかんのかな!」

と思ってしまうよな。そうじゃない。もう無条件です。もう終わった。

「わがこと終りぬ。もう天界は開かれた。もう私はお前さんの中に入りたくてしょうがない」

と、心の戸を叩いている。「はい」と言つて開けば、一つになってくださる。

「自分は汚れています。自分は聖書を読んでいません。自分は祈りが少ない」

「もうそんなことは言うな、聞き飽きた。お前を愛しているから。お前は片付いている。生命を与えたいんだよ」

と。そういうふうには、皆さん、騙されたと思つてくださいますよ、私に(笑)。私は詐欺師ですか、私が詐欺師なら、キリストも詐欺師ですよ。私とキリストは本当に一つの思いで語っている。固い友情で結ばれているんですから。

「あなた方を僕とは呼ばない。友と呼ぶ。すべてのことを語った、証したんだから。

これからいいよいよそうするよ」

と。非常に楽しい言葉を残して向こうへ行かれた。今度は私たちは、それがズバリ成就したその次元で、レベルでしつかり受けとつていく。これをしてください。牧師先生方がどのようなことをお話しなさっているか、それは私は知りません。私は常に現在として受けとる。旧約はキリストにおいて成就し、キリストの言葉は今ここに成就している。いよ



いよ成就していく。神の国はますます前進してやまない。この真つ暗な世の中で、

「あなた方は光である。私がお前の光であるから。あなた方は地の塩である。」

私が塩だから」

と。すべて、「あなたはこれこれだ」と言われたら、その背後に、「私（キリスト）」がそうだから」という、「私が」というものを掴^{つか}んでないと。それがなかったら、あなた方は枝のようになり捨てられて枯れてしまつて、何も成らなくなつてしまう。「私が」というものをいつも、キリストの言葉の背後につかみ、そして常に一つになつてくださった。一つになつてくださっている土台は十字架なんです。これが揺るがない以上は絶対に大丈夫だと、大胆に喜ばしくやつていく。

「喜びを与える、平安を与える。私の愛の中に留まっていなさい。その愛でお互いに愛し合いなさい。これが私の新しい掟だよ」

と。そのように進んでいつているんですから。

そして、それが現実はこの世の中で実現していったのが使徒行伝なんです。キリストは本当に聖霊となつて乗り移つて、あんなに凄いことが起こっているでしょ。使徒行伝、使徒言行録、あれがヨハネ伝の続きです。

あのあつと驚く業、それは私たちには無理ですよ。あるご目的のために、いろんなことをなさるかも知れないけれども、誰も誰もが手品師みたいにそんなことをやつたら、世の中は狂いますよ。それに躓きますよ。キリストがはつきりと「やりなさい！」と仰れば、それはやりやすいよ。でも、はつきり仰らないのに、

「昔、ペテロがやつたんだから、私もやる」

なんて、そんなはだめですから。それはどこまでも平伏しです。質的にキリストは聖霊となつて私たちの中で働きたもう。愛の働きをなさる。愛の御業をなさる。人々を闇から光へ変えた。死から生命へ変えた。これがすべてです。痛い足が治る。これは有り難いけれども、その生命には関わりない。ですから、あまり見える現象——使徒行伝にバンバン出てきます——見える現象に躓かないでください。

「あれが起こらなければ聖霊が来ていない」

なんて思われなくて、もつともつと深い、静かな深い生命の豊かな世界です。

そんなふうに思いますので、今日はずうつと旧約からヨハネへ行つて、ヨハネから更に使徒行伝、そしてパウロ書簡に行つて、私たちはどんな所に行くかということを語つてくれている。実に新約聖書はよく出来ています。そう思いますね。

それではこの辺で終わることにいたしましょう。

● 祈り

では、一言お祈りいたします。



主イエス・キリストさま。今日も皆さま方と一緒に、このヨハネ伝を通して展開されているあなたの恵みの世界を、喜びの世界をご一緒に味わうことができました。ありがとうございます。「わが愛に居れ」と、ただこの一言をあなたは私たちに残してくださいました。

「わが愛に留まれ。私の聖霊があなたの方の内に宿るなら、いやもう宿っているから、だから、私がしたよりもっと大きな業をなすよ。私がお前と一つだから。お前と一体だから」

と。本当にありがとうございます。お一人お一人に賜ったこの恵みの言葉、生命の言葉を我々の宝として、

「汝の宝のある所に心もあるなり」

と。本当に主さま、あなたと一如一体となつて、歩ませていただきます。それがあなたの御意だからです。

どうぞ、主さま、老いも若きも、あなたの賜った道を喜び勇んで進んで行くことができますように。そして、皆さんと祈り合い、手を取り合い、この渺々たるクリスチャンでしかこの地にはいませんが、しかしながら、一人ひとりが百万人に価します。

主さま、そのような大きな希望をもつて、残れる地上の生涯を盛んに花咲かせてくださいますように、主イエス・キリストの尊い聖名によって感謝してお祈りいたします。アーメン。

